『親鸞』（上・下）
五木寛之 著
（講談社）2010年

# “親鸞”を読んで

医療科学部准教授
（臨床工学科）
酒井 一由

図書館の中をあるいていると、ふと私の目に止まった本があった。それが今回紹介させていただく“親鸞”である。本屋さんでよくある偶然の出会いである。特に、親鸞に興味があったわけではないが、何と無く手にとって読み始めると、とても面白く止まらなくなってしまった。

親鸞は悩みの大御所というか、真摯に真正面から苦悩に対する姿は感動し、私にとって大きな衝撃であった。以下、その幾つかをご紹介したい。

範宴（はんねん：親鸞の若い時の名前）が修行を終えて帰り道でのできごとの一節である。

女は範宴の手をとって、温かく、やわらかな場所へとひきよせた。幼いころ、犬丸の妻のサヨの胸に抱きしめられたことがある。そのときの甘く懐かしい気分とは全く違う未知の感覚だった。「いけない。やめてくれ」あえぎながら、範宴は相手をおしかえそうとした。だが、なぜか萎えたように腕が動かない。かえって女の胸にふかぶかと顔をうずめるような具合になってしまった。女の胸は豊かで、いい匂いがした。乳房のあいだに顔をおしあてたまま、一瞬、範宴は気が遠くなりそうな恍惚感をおぼえた。女は彼の手を熱く湿った場所へ誘っていく。「できない…」と、範宴はうめいた。

このような普通の人間におこるような誘惑、悩みなど、何度も出てくるのである。また、われわれ医療人として、考えさせられる場面もある。

髪を振り乱した貧しい身なりの中年の女が、五、六歳と見える男の子をかき抱くように泣いていた。「これを見ておくれ」と女は範宴に一言、一言、しぼりだすような口調でいった。男の子の背中は赤黒く腫れ上がって、イチジクの実のような巨大なできものが口を開いている。範宴は思わず目をそらせた。「なんやこれ、気持ち悪いのう」周りに物見高い群衆が集まっている。宴範はごくりと唾を飲み込んだ。念仏を唱え、〈吸うのだ！〉宴範は力の限り息を吸った。「何かが私の腹の中に…」

また、こんな言葉を言う場面もある。

「情けないことだが、そうではない。いまはわが身の浅ましさ、罪深さに、ただただ呆れ果てるばかりです。ふたたび同じことがおこれば、わたしはまた同じ衝動に身をまかせるかもしれない。わたしの心に巣くう得体の知れない煩悩は、どれほど懺悔しても、どれほど修行をかさねても、とうてい根絶やしにすることはできないのです。ほかの人のことは知らない。このわたし一人の心のありようなのです。人にほめられたい。勇気のある立派な人間と思われたい。できることなら名誉も、高い身分もほしい。学問にもすぐれ、まわりの者から尊敬されたい。そしてわたしは…」

このように、一つ一つのシーンが鮮明に描かれていて、まるで映画を見ているようだった。法然上人から選択集の書写を許され、恵信を両手で抱え上げて、喜びを分かち合うところ、思わず何度も読み返してしまった。また、読み終えた後、何とも清々しい気分になった。それに加えて親鸞は悩んで、悩んで、とことんまで悩む、本当に人間的な印象を受けた。こんな偉い方でも、人生に悩んでおられたことを考えると、自分の日々の行い、迷い、悩みなど何と小さいものであろうかとふと安堵の感を感じてしまう。また、不謹慎な言い方をお許し願うならば、小さなもので良かったなと、少し喜びにも似たものを感じてしまう。

仏僧の人生の話というと堅苦しいイメージだが、上述したように、この本はとてもエンターテイメント性に富んだ時代活劇で飽きさせない。親鸞やその他仏僧の信念や仏教の捉え方についても、解りやすく丁寧に書き込まれてあるので、抵抗なく入ってくる。教科書でしか知らなかった法然や親鸞を身近に感じることができる本である。小説として楽しみながら、親鸞の人となりだけでなく、法然との師弟関係の経緯や繋がりの深さ、浄土門の教えや念仏の意味、激しい弾圧など、日本史の教科書には載っていない部分を知ることができて大変興味深かった。極端な思想で親鸞とは対立しながらも、ある意味真っ直ぐだった遵西の処刑直後に念仏が沸きおこるシーンでは、思わず力が入ってしまった。越後へ流刑になるところで終わっているので、続編も読みたくなる。宗教と思わず、一人の人間の波乱万丈な物語として、気楽に触れて頂きたい。

本学の図書館には、このように医学系の本以外にも面白い本がいっぱいあります。最近話題の村上春樹の本もたくさんあります。ぜひ一度、図書館をぶらぶらして、興味がある本を取ってみてはいかがでしょうか。

（当館所蔵 請求記号 913/Shi/(1), 913/Shi/(2)）